

## 勇ましい少女

太田 龍 東

ロシアのウラジホストツクと云ふ所に、日本の本條良正と申す人が参つてゐました。此人は、播磨國山崎の藩士で、今から恰度四年前に、貿易商の爲めに参つたのであります。まんが悪くて先方に参りますと、間もなく妻は病死しました。しかし、女の子が二人ありましたから、良正は、この子の成長くなるのを楽しみに、毎日商業を勵みました。そうして商業もだん／＼繁昌して参りまして、遂にはりつばな貿易商人となり、親子三人が睦まじく暮すやうになりました。

よい事ばかりは長く續かないものであります。此良正と云ふ人の家に、大變な事が出来て参つたのであります。それは甚麽事かと申しますと、

ある晩盜賊が遣て來まして、この家の品物を盗みだし、それから女の子二人をつれ出しまして、その上この家に火を附けて、焼いてしまふと云恐ろしい事でありました。

今その事を、これから詳しくお話してみましよう。ころはちやうど、日本とロシアが戦争をする少し前、お正月三日の夕方であります。日本では、今日はお正月の三日でありますからと云ふので、この良正と申す人も、御正月の御馳走をこしらへ、子供二人を前にならべまして、御馳走を食べながら、種々なお話しをして聞かせてゐました。

またこの子供の名を、お話しするのを忘れてゐましたから、今こゝに一寸申して置きます。姉の方は、今年十五で菊枝と云ひ、妹の方は、重殖と云つて十三であります。二人とも、毎日御飯をた

いたり、お掃除をしたりして、又お父さんのお留  
 主の時は、家の番をしておつ母さんの代りをいた  
 します。さうして二人とも誠に美麗で可愛らしく  
 ありましたから、みなの人に賞められてゐまし  
 た。

ところが、三人でお話してゐますと、門の戸を  
 トントンとたたく人があります。お父さんがすぐ  
 出て見ますと、ロシヤのお巡りさんがゐて「お前  
 を少し調べたい事があるから、すぐ警察署まで來  
 い、署長の命令で連れに参りました」と申します。  
 良正と云ふ人は悪いことをして、警察に呼ばれる  
 やうな人ではありませんが、お官のことでありま  
 すから、仕方なく参る事にしました。そこで女の  
 子二人をそばに呼び、「お父さんは、これから一寸  
 お役所まで行つて來るから、爾等は寢んで待つて

ゐなさい、すぐ歸つてきます」と云つて、お巡り  
 んに連れられて参りました。

二人の女の子は、お父さんが留主になつたもの  
 ですから、淋しくてすぐ寐んでしまいました。

しばらくすると、此家の門の外に、三人のロシ  
 ヤ人が忍んで参りました。やがて其中の一人が細  
 繩を出して、塀の内から外に出てゐる松の枝にか  
 けて、それを傳つて塀の内へ飛び越へますと、  
 他の二人も全じ様に、繩を傳つて内に飛び越へま  
 した。

此三人は、こん度は戸を外して内に入り、少し  
 も恐れる様子もなく、まるで自分の家へ歸つたや  
 うな調子で、棚の中から御馳走を出して、お酒を  
 呑み初めました。

この物音に、姉の菊枝は眼を醒まして見ます

と、人の話し聲がしますから不思議で堪りません。お父さんは留主であるのに、誰が話しをしてゐるのであらふ、夢ではあるまいかと思つて、よく様子伺つてゐますと、こんな話しをしてゐます。

甲『おい兄弟分、よく酔がまはつたぢやねーか、しかし己ア、人の家に盗賊に忍入て、お馳走を食べて酒を呑んだのは、今晚が初めだよ、ゲツプ、ははアツ、のんきな盗賊様だね。』

乙『誰だつて初め手だらうよ。だが速く仕事爲ねーと、又主人が歸つて来ちや駄目だよ。』

丙『ま 大丈夫さ。此所から警察に行くにや一時間半かゝるからね、往來りで三時間はかゝらア。さう心配しねーで、腹が減ては戦が出来ねーから、しつかり詰め込むがーよ。』

こんな話をしなから、食つたり飲んだり大騒ぎ

を遣つてゐます。菊枝は夢とも思はれませんが、其儘起き直つて、尙ほ伺つてゐますと、又次の話をし出しました。

甲『この家の主人をうまく外に出してしまつたら、宛然自分の宅へ歸つた様な氣がするぢやねーか、後には玉子の様な可愛らしい二人の尼つ女が寐てゐるだけで、少しも憚る者はねーや。なアおい。ゲツプ。』

乙『しかし、よく考へて見りやア、可愛さうな者は二人の子ぢやねーか。寶物は盗られ家は焼かれてよ、その上自分迄で連れて、賣り飛ばされるとは露知らねーで、よく寐てゐるだらうがね。後でさぞ驚く事だらうよ。』

丙『オイ、手前のやうにお慈悲深い事ぢやとても碌な盗賊様にやなれねーよ。己れ等だつて、

好んでこんな事ア爲たくはねーが、あの野郎（良正のこと）が昨年さくねんの暮くれに、餘り己等に恥辱はぢをかゝせたから、一つはその仕返ししかへしぢやねーか、何にもそんなに可愛かあいさうに思ふ事ことアありやしねーや。』

甲『そ、そんなくだらねー事ことア止めにして、仕事しごとに蒐からうぢやねーか、那麼それにしても、仕事しごとの段取りだんどりを定めなきアならねーが、一番まっさ先まきに家に火ひを附つけてゐいて、それから品物しなものと尼あまつ女ぢよとを連れ出すとしたら什麼どうかね。』

乙『オイ、何なにツ言いつてるんだよ、手前てめい酔拂よばらつてやがるな、先まきに火ひを附つけて堪たまるものか、そんな事ことしたら己おれさんたちが、先まきに焼やけらア、べらばーめ。不まちよ。火ひを付つけるなあ後あとに決定きまつてらア。』

丙『それぢや仕事しごとにかゝらうだねーか。』

と三人さんは、酔拂よばらつてヒヨロ／＼しながら、品物ものを

出だしかけました。

この話はなしによつて見みますると、この盗賊とうぞくは、只品物ものを盗ぬすみに來きたばかりではなくて、良正りやせいと云いふ人に何か怨うらむことがあつて、その仇あだを返かへす爲ために、家に火ひを附つけたり、又また二人ふたりの子こをも連れ出だすと云いふことが知しれます。それにしても、何なんと殘酷ひんたらくしい仕方しかたではありませんか。

先程さきほどから、この話はなしを聞きいてゐた、菊枝きくえの心こころは甚と麼までありませう。これが若もし、この年頃としごろの他ほかの娘むすめであつたなら、こんな時ときには決度きやくど、頭あたまから蒲團ふとんでも被かいで、只泣ただくより外ほかは仕方しかたがありませうまい。しかし、この菊枝きくえは年としこそ若わかいが、なか／＼男子おとこも及およばぬ勇氣げんきを以もつてゐます。

菊枝きくえは、この時ときすぐ飛とんで出でて、盜賊とうぞくを斬きらうかと思おもひましたが、よく考かんがへて見みますると、先方むかひ

は鬼のやうな荒男三人、こちらは何と云つても手  
 弱い少女一人、恰度飛んで火の中に入る夏の虫の  
 様なもので、とても及ぶ事ではありません。それ  
 かと云つて、この儘にして居れば、今の話の通り  
 品物は盗られ、家には火を附けられ、その上自分  
 等二人は盜賊の手に捕られねばなりません。

出れば殺され、出なければ捕られ、どちらにし  
 ても助からぬこの場合、こんな悲しい事が亦とあ  
 りませうか、那麼に妾はまだ諦らめるとしても、  
 年も行かない妹が、甚麼に悲むであらふ。又何も  
 御存じない爹爹は、後で甚麼に御心配成さるであ  
 らふ、早く爹爹が歸つて下さらばよいに、わア、  
 什麼したらよからふ。と小さい狭い胸の中に、い  
 ろ／＼と思ひ廻らしてゐましたが、旋て心をと  
 直し、兎に角妹を起さうと思ひまして、重廻の顔

を見ますと、何も知らないで、晝間の遊びに疲勞  
 て、すや／＼とよく寐てゐます。

菊枝は、その無邪氣な可愛らしい重廻の顔を見  
 ますと、可愛さが一層増して參りまして、こんな  
 によく寐てゐるものを、無理に起して心配させた  
 くないと思ひましたが、それかと云つて、何時ま  
 でもこの儘には置かれませんかから、

『重廻さん、重廻さん起きなさいよ、大變なこと  
 が出來てよ。』

と小聲で起しますと、重廻は、如何にも寐むさう  
 な顔附で以て、

『姉さん、お父さんがお歸りなの。』

と云ひながら、又蒲團の中へ顔を入れてしまいま  
 した。

『不錯ちやありませんよ、早くお起きなさいった

らば、大變な事なの、あの盜賊がはいつたのよ。』

この盜賊と云ふ言葉には、いかな寢い重廻でもよほど驚いたと見へまして、すぐ起きて姉に絶りながら、はやブル／＼震へてゐます。

姉は言葉靜かに、

『そんなに恐愕つちや不可せんよ。まうお父さんがすぐお歸りだらうから、心配おしでないよ。』

『姉さん、盜賊なんかはいつて什麼したらいでせう。おつ恐愕いね。』

『盜賊が今にね、大切な品物を皆盜つて行きますから、それで盜らない先きに姉さんは、これから盜賊を斬つて遣りますから、重廻さんはこの押入の中に隠れてねて、甚麼な事があつても決度出ては不可せんよ。』

と云へば、妹は心配さうな顔して、

『姉さんそんな事して、もし盜賊に斬られたら什麼して、お父さんのお歸りまで、待ちなさいよ。』と止めます。

『けれどね、もしお父さんのお歸りが遅くなるとね、家に火を附けられて、二人とも盜賊が連れて逃げると云ひましたよ。』

『さう大變ね、だつて姉さんが殺されちや、それを大變じやありませんか。』

『たとへ殺されても、この儘連れて逃げられたら、お父さんに申譯がないから、一刀でも斬り付けて死ねば諦めもつきませう。重廻さんは、この様子をお父さんに知らして下さう。』

『でも姉さんが斬られたら、それを見てゐる譯には行きませせんは、妾も一所に刀で斬つて遣りますよ。』

と云つて、今迄震へてゐたものが、俄に勇氣を出して参りました。すると姉は、

「駄目ですよ、若し二人とも殺されたら、このことをお父さんに知らして、仇を討つて貰ふ事が出来んぢやありませんか。そんな事を言はないで、姉さんの言ふことを聞いて、早く押入の中におは入りなさい。」

と無理に妹を押入に入れて、その身は襦袢を十文字にかけまして、床にかけてある寶刀を取り、盜賊を斬る覺悟をしました。

さて覺悟はして見ましたが、前にも申しました通り、年若き弱女の身ですから、とても手向つた所で勝つ見込はありません。そこで菊枝はよい考へを出しました。それは、盜賊が荷物を擔いで、玄關の階段を下る時に、隅の暗い所に匿れてゐて

斬り附けると云ふことであります。これは餘程よい考へであります、いくらずう／＼しい盜賊でも玄關先には火を燈しませんから、重い荷物を擔いで出る所を、暗討にすれば、うまく参りさうであります。

(つづく)

### 嗅ぎ當てる法

これも、一寸面白い手品ですが、ごでんじゆしませう。

先づ、四五人集い居る處で、させるを一本出して自分が、後ろ向いて居る中に、させるの吸口でもがんとびでも、中央でも、どこでも思ふ所を觸つて置いたら、自分は、夫を見ないで居て、嗅ぎ當て、見せるといふのです。すると、皆が面白がつて、そんならといふので始める。自分は後向くか